罫で上下と行間とを劃し、欄内約二十サンチメートル、五（約六寸七分）、行數總計百七十を殘して居る。末尾に七行を劃した餘白があつて、一見すると完本の體裁に見えるが、しかしこの餘白は、卷首に存した紙面を切離して第百七十行の後に連接貼付したもので、無論初めから卷尾に存したものではない。高楠教授に之を讓つた人の言葉によると、第百七十行以下にまだ數行があつたが、紙面の汚損が甚しかつたので、こゝで切斷して、卷首の空白の紙面をこゝに補つたとの事であるそうだが、殘卷末尾の狀態は、他の部分と同樣極めて好く保存せられてあつて、此の次の行から俄に汚損して居つたものとは認められない、或は思ふに此の次にもなほ可なり長い文句の存したのを、屢認められる例のやうに、こゝで切斷して二卷、若しくはそれ以上の幾卷かにして賣却したものでは無からうか、他日何處からか此の殘卷に接する部分が現はれて來ないとも限るまい。

三　現存せる漢譯の景典

大秦景教流行中國碑に、唐の太宗時代に景典の漢譯されたものゝあることを記して、「翻經書殿」といひ、また「翻經建寺」などゝ見えて居るが、然も此の碑文中には、景教流行の有樣を述べるに當つて、誇張修飾の跡のあることは否む可らざる所であらうから、此の譯經の事についても、實はどこまで信じて宜しいか定め得なかつた次第である。然るに此の事は、假令太宗時代の事としての證明にはならぬにしても、かの敦煌出土の景教三威蒙度讃に依つて、始めて事實上證明せらるゝことに成り、またその末に附した尊經の一篇に依つて、有名なる景淨の譯出した三十五種の漢譯景典の名をも知り得るに至つた。無論この三十五種の中には、曾ても述べたやうに[1]、景典とは思